

多様化の時代における日本の英語教育の新たな課題

松谷 緑・石井泰三*・小川弘敏**・中本 智***

Issues for Teaching English in the New Learning Environment in Japan

MATSUTANI Midori, ISHII Taizo*, OGAWA Hirotohi**, NAKAMOTO Satoshi***

(Received September 24, 2021)

はじめに

今や世界における英語はEnglishesと呼ばれるほどに多様化している。一方、日本では、小・中・高等学校一貫した学びを重視し、外国語能力の向上を図ることが求められている。4技能をバランスよく、なかでも、話すこと[やりとり・発表]の力を育成するとして、各現場の教員は意欲的な取り組みを行っている。しかし、校種間の連携、また、日本の学校における言語の教育としての日本語と英語の連携といった観点からは課題が多く、手探りの状況と言える。本論は、グローバル化が進む時代に日本の英語教育が抱える課題について、高等学校や大学で教える視点から、現場実践や海外での状況を踏まえて検討し、解決の糸口を探るものである。

1. 培うべき言語能力

英語使用のためには4技能をバランスよく身につけたい。現在日本では話すことへの関心が高く、学校における話すことの活動もやりとりと発表、それぞれに意識した実践が行われている。

現場の現実としては、多様な生徒を前に、教師は様々な生徒の必要に応えなければならない。例えば、進学校と実業校では生徒の興味が異なるし、生徒の中には、進学を目指すものもいれば、就職を希望するものもいる。学習指導要領はありつつ、生徒の主体的な学びを引き出すためには、個々の生徒の望む進路に沿って、必要とされる能力を身につけさせることが求められる。生徒の学ぶ意欲を高める現実的な工夫が必要である。

また、高等学校や大学の入学試験対策は生徒にとって、学校にとって、重要であり、その試験方法は筆記・記述が中心となる現実もある。

1.1 話すこと(やりとり)の指導の難しさ

話すことへの注目が高まっており、特に、「発表」と

「やりとり」と分けて考えるということは、その背後に、用意した発表だけでなく、やりとりができるようになるという志向が存在する。しかし、このやりとりというのは、基本的な言語使用のあり方としては、実際の使用場面に大いに依存するものである。すなわち、会話を教えるということの困難が存在する。ここでいう会話というのは、とにかく何か話そうというレベルではなく、内容における相応の「質」と実際のコミュニケーションで通用する表現としての「容認性」を持つものである。したがって、ある程度のインプットがない限り、難しい。相応の語彙と文を構築する基本的な文法を即座に使えることが求められる。さらに、産出されたものを教師が訂正して指導するといったことができないものである。書くことや読むことは、現前とテキストがあるので、添削したり説明したりできる。しかし、やりとりはそうはゆかない。全く同じ相手と同じ場面・同じ状況でやりとりするということは、二度と起きないからである。教師としてできることは、モデルを示し、学習者の実践については今度同じような場面があったらこうするとよいのだという方針を示すくらいで、たとえば、口語コーパスの情報を提供したところで、結局は学習者が自ら経験によって上達してゆくしかないであろう。

一方で、従来学習者に必要以上に高いハードルを設けていたのではないかと考えられることもある。いわゆるネイティブみたいな発音である。自分は発音が苦手だという思い込みのもと、英語が嫌いになったり、英語で話すことを億劫がったりする生徒が多い。世界に英語が広がり、多様な英語話者が英語を使ったコミュニケーションをとっている現実において、日本人にアメリカ人やイギリス人のような発音をしつこく求める必要はないと言えよう。もちろん、何らかの理由で発音の上達を求める生徒がいればその指導もできることも教師の資質の一部である。グローバル化が加速し、異文化理解や多様化へ

* 学校法人樞蔭学園聖光高等学校教諭 ** 山口県立下関工科高等学校教諭 *** 山口県立華陵高等学校教諭

の認識の重要性が叫ばれているとはいえ、長い年月の中で築かれてきた社会構造における偏見はそう簡単に払拭されるものではないし、イギリス英語やアメリカ英語の標準発音にある種のステータス（威信形としての存在）が認められることがあるのも現実である。

さらに生徒の口を重くしているのは、間違えてはいけないという意識の強さである。本来、間違えないようにするのは大切なことである。書くことを前提とするなら間違えてはいけない。読者が目の前にいないから書くことが選択されるのであり、即座のフィードバックが叶わないならば、読まれた時にどう伝わるか細心の注意を払って言葉を選択する必要がある。一方、話す際には、産出においてその場でじっくり考えることはできず、即興性が求められるが、相手が目の前にいて、反応を見ることがはできる。話しことばと書きことばの大きな違いがそこにある。少々間違えても構わないのである。間違えても言い直したり、言い換えたりすることができる。さらに言えば、文として整っていないとしても、単語を並べれば伝えることは可能である。

状況を複雑にしているのは、現代では、話し言葉と書き言葉の境界線が見えにくくなっていることである。デジタル化の進んだ時代では、話すように書く(入力)ことが日常化しており、「口語的な表現を文字で見る」ようになってきている。この点は学習者を取り巻く環境として心得ておかなければならないであろう。ただし、程度の差こそあれ、書き言葉と話し言葉の境界線が曖昧なのは、今に始まったことではない。また、公的文書、契約書、論文といったあらたまった文章や高度に正確さを要求する文章の存在は依然として変わらないのであるから、正しく書くことのできる能力は生徒の将来の職業選択の可能性を考えるとたいへん重要である。

1.2 英語も変化している

英語を学習する目的は実用だけではないことは改めて確認しておきたい。話せるようになることを主たる目的とするならば、便利な道具が安価に利用できるようになる将来、英語教育のニーズは縮小せざるを得ないであろう。しかし、電卓があれば計算を学ばなくてよいかと言えばそうではないように、英語を学ぶことは、言語やコミュニケーションへの深い理解のために重要なことである。母語以外の言語を知ることが、相対的に母語である日本語の理解を深めるものでもあるし、また、世界にはいろいろな言語があることを知り、多様性を認める力にもつながる。

言語は使用されている限り変化する。グローバル化や情報化が進む新たな時代の特徴として、学習者も英語の実態に触れる機会が多くなっている。昔は、学習者に

とって、英語は、教科書や限られた教材で見聞きするものであったが、今や、学習者の周りにはリアルな英語が身近にある。特に英語母語話者の話し言葉の現実には、日本で教えている英文法に照らしていえば「間違っただ」現象が散見される。以下に少し紹介する。

次の英語は、松谷が大学の英文法の授業を受講していた学生から示された例である。スマートフォンの画面を見せてくれて、下線部の英語は現在完了を用いるのが正しいのではないのかという質問であった。彼女はバスケットボールに興味があり、日頃から関連のSNSやツイッターを見ていたらしく、この文はアメリカのプロバスケットボールプレイヤーがアップしていた文であった。

“I got better. I’m a better player now than I was last year.”

確かに、「昨年より今年のほうが調子がよくなっている」という意味であるから過去のことでない。アメリカ英語では現在完了の使用がどんどん縮小しているが、これもその例であろう。アメリカ英語で見られるようになった用法は他にもある。例えば、couldが仮定法に限らず、過去に実際に「できた」ことにも用いられているのをよく見聞きするようになった。以下は、もう既に辞書でも紹介されているような例で、be different の後は、fromとは限らない。

This is different (from / than / to) the other one.

また、もはや、会話やネット上ではthere’sが複数でも用いられることは珍しくない。

There’s these three men and they’re walking through the desert. (Biber et al. 1999: 947)

安藤 (2005: 686)は以下のような例をあげ、「there’sのあとには単数名詞はもちろん、複数名詞も普通に使用される。there’sが文法化(grammaticalization)によって、『存在』を表す不変化詞(particle)になっていることがわかる。」としている。

There’s a lot worse teams in the league than us. (*The Times* 1995/3)

There’s two policemen at the door, Dad. (Swan 1995)

デジタル化が進む時代に現れてきている現象として、コンピューターに優しい、そしてもちろん人間にとって

も使いやすい英語とでもいうようなものへの傾向が、主として、ビジネスの世界で観察される。例えば、接触節を用いず、必ず関係代名詞thatを使用しようというものである(Kohl 2008)。あってもなくてもよいというより、明確な目じるしがあるほうが構造の分析において処理がしやすいであろう。Kohl (2008)はソフトウェアの文書の例を豊富に挙げ、Global Englishについて、曖昧性や不要な一貫性の無さを排除してゆくこと、文構造を明示的にし、非母語話者にも母語話者にもわかりやすくすることを目指すとしている。

In this book, Global English refers to written English that an author has optimized for a global audience by following guidelines that go beyond what is found in conventional style guides.

The Global English guidelines focus on the following goals:

- eliminating ambiguities that impede translation
- eliminating uncommon non-technical terms and unusual grammatical constructions that non-native speakers (even those who are quite fluent in English) are not likely to be familiar with
- making English sentence structure more explicit and therefore easier for non-native speakers (as well as native speakers) to analyze and comprehend
- eliminating unnecessary inconsistencies

(Kohl 2008: 2)

いっぽうで、‘Don’t make any change that will sound unnatural to native speakers of English.’ (Kohl 2008: 4)として、英語母語話者にとって不自然と感じるような変更をしないことを‘the Cardinal rule’として明言している。

だが、母語話者と言われる人々の間でも見解が統一していないことは多い。上記で触れた現在完了形についても、例えば、イギリス人とアメリカ人では反応が異なる。また、次の西脇(2019: 58)からの引用に見られる現象も、教科書はいわゆるネイティブチェックは受けているはずであるから、母語話者の間でも判断が異なる場合もあることを示す例であろう。

An observer noted, “She [= a bear] came out and got a fish, and pulled it back, and then she let the other one eat.” The young female obviously cared for her brother [, and her support was crucial for his survival]. (下線は西脇による)

上記の英文が含まれる単元 (Lesson) の文章は動物の感情について英語で書かれたある文章から、一部を用いて、教科書用に再構成されたものである。ここで、下線を施したeatの解釈について検討したい。教師用資料によると、教科書作成側は、eatの形に現れていない目的語について、the fish/ itという定の解釈を提案しているようである。しかし、10名の英語母語話者は全員、定の解釈をするためには統語的な目的語を明示すべきである、と回答している。

1.3 規範についての見直しとやりとりに必要な力

和泉(2016b: 235-236)は、語法における時制の一致について、*Bob said he is innocent.* と *Bob said he was innocent.* という2つの文の異なるニュアンスを説明した上で、次のように述べている。

時制の一致は単なる形式操作として自動的に当てはめられる絶対的規則などではなく、あくまでも伝えたい意味を考慮してそれに即して使われる柔軟な文法規則なのである。とかく白黒といったように正解か不正解かを断定しようとする学校文法には、必ずしも反映されていない実際の文法の姿である。このような例からもわかるように、教室指導が習得に与える影響は、その指導内容、指導方法、また指導タイミングなどとも大きく関係しており、他の多くの外的要因と内的要因と複雑に絡み合いながら、習得プロセスに関わってくるのである。

もちろん、教育するためには、指標となる規範は必要である。学習者向けの語法書について、住吉(2016: 8-9)は以下のように述べて、規範についての見直しが急務であるとしている。

英語を学習する非母語話者の増加に伴って、学習者向けの語法書が出版されるようになった。これらの語法書に掲載される情報は、その教育的な性格上きわめて保守的にならざるを得ない。学習者向けということもあり、このような語法書で挙げられている項目がそのまま英和辞典に非文情報として採用されることも少なくない。最近では学習者コーパスが構築され、英語母語話者のデータを集めたコーパスとの比較をもとに、学習者がつまづきやすい事項を多数掲載している語法書もある。しかし、このような語法書で「不可」とされている構文や表現が、英語母語話者に使用されていることも珍しくない。このような「誤り」には、従来の伝統的規範にもとづく語法書では触れられていない項目も多い。

このように考察してみると、母語でない英語を使用する限りは文構築のための基本的文法知識の習得はもちろん必要であるが、英語学習において、文脈から意味を理解すること、言語の情報構造や多様性への認識と理解を培うことも重要と思われる。特に、発話時の場面でその場の状況に合わせて「話す」ことができるようになるためには忘れないでおきたい観点である。こういった点は母語においては実践しているはずのことである。

メルケルバッハ(2019: 156)にも「第1言語は実際には、人間の社会化のための最も有力なツールであり、…メタ言語的知識、すなわち言語そのものがどう機能するかに関する知識を発達させるツールであると認識されてきています。」とあるように、母語の重要性については改めて指摘されているところである。

2. 生徒の学習意欲を高める指導

「なんで英語を勉強しなくちゃいけないの?」とは古くて新しい問いである。最近のはかつてに比べると、この問いを発しにくい雰囲気があるが、日本に住む多くの日本人は英語を使わずに生活しており、また必ずしも英語が使えるかどうかで生活の質や幸せに影響するという社会でもない。いずれにせよ、英語は必修科目であるが、子どもにしてみれば、なぜ?にある程度の説得力があれば、学習意欲は向上するであろうし、何より、この問いに対し、「試験があるから」とか「TOEICで高いスコアをとるため」とかでは、テストを受けない場合やテストが終われば、意味がないことになる。教師として、学ぶ意義を伝える答えを用意しておきたいものだ。

よく言われてきたのは、世界の人とコミュニケーションをとるため、とか、日本にいてもこれからは多くの外国人と接する機会が増えるからといったものである。確かに一理あるが、このことは、反面、日本の子どもたちに、世界の人には英語を話しているという誤解を抱かせてもきた。世界にはいろいろな人種や言語があり、もともと英語を話す人は限られており、教育によって英語を用いるようになる外国人は限られていることも理解しておきたい。ただし、国際的な場面で英語が用いられることには間違いなく、道具としての英語は便利である。

日々の授業の中で、ちょっとした工夫をすることはできる。英語だからということではなく、課題に取り組む手順や、設問を解く順番を生徒自身が選択できるようにすることもその一つであろう。授業運営には長期的な計画があり、基本的には教師が明確な指示を出さないと生徒は混乱してしまうが、タイミングをみて、余裕のある時に、生徒自身が選べる取り組みを仕組むことは可能であろう。石井は実際にこれまでそういった場面を作る試

みをしてきたが、英語が苦手な生徒やなかなか集中して取り組むことができない生徒も、自分で選んだのだからという意識が生まれ、一人一人が主体的に取り組む姿が観察された。

これからの新たな道具として、情報機器やAI、翻訳機能が発達し、子ども達の間でもタブレット端末やスマートフォンが普及しつつあり、辞書もオンラインでの利用が一般的になってきている。道具は便利だし、児童生徒の興味を引くが、言語の実力を伸ばしているかどうかは別である。英語学習に苦勞して時間とエネルギーを費やさなくても、便利な道具が外国人とのコミュニケーションを可能にしてくれる。

だが、生徒の中には将来専門的な領域で自分の力で英語を用いたコミュニケーションをすることになるものもいるであろう。現実の指導の場で(例えば作文指導等)どのように工夫すればよいだろうか。外国語でしか伝えることができない相手とのコミュニケーションの機会を用意すれば、相手と更に理解しあいたいという気持ちが学習意欲につながる。「理解しあいたい」という生徒の思いを重視し、学習効果を上げる取り組みとして、山口県立華陵高等学校で実践されている国際交流を通したライティングやスピーキングの活動は一つのモデルとなる。

以下、中本が参画している華陵高校における実践を紹介する。華陵高校では姉妹校(オーストラリア)や米軍岩国基地内の高校生とオンラインでの交流を進めている。彼ら彼女らは日本語を学習している英語母語話者であり、日本の高校生とも同世代として興味関心を共有することも多い。こういった実際の交流においては、話す聞くといった活動と書く読むといった活動を自然な流れで行うことができる。以下のように、段階を踏んで、生徒たちの主体的な取り組みを促しており、交流も深まっている。はじめは、話す聞くといった活動(やりとり)を行っていたが、書く活動と組み合わせて準備させることで生徒の主体的な工夫が増え、対面でのやり取りも充実してきている。

初期：お互いに質問を用意する。自己紹介ののち用意していた質問をする。(話す聞く)

→交流を楽しむ機会との出会い。この段階では技能に関する学びは目的としない。

中期：事前に自己紹介を文面で交換し、済ませておく。対面の日にはそれぞれのことについて尋ねたり答えたりしてやりとりする。(書く読む・話す聞く)

→事前に自己紹介文を作成する際、明確な相手がいるので、生徒は実際の場面を想定しながら作成し

ている。提出させて、教師が添削できる。文章作成に際し、あまり翻訳に頼っていない印象。オンラインで話すときも、決まった質問と応答を繰り返すだけの形式的会話ではなく、自身の言いたいことを伝えようとする工夫が見られた。

現在：事前に自己紹介や学校紹介を含むメッセージを複数回、文面や録画した動画で相手とやり取りし、お互いについての理解が少し深まったところでオンライン会話をおこなう。

→事前に相手のことが多少なりとも分かっているからだと話しやすい。事前に多くの活動をするので、技術的な学びにもつながる。具体的な相手を想定して書いたり話したりするため実際のコミュニケーションに近い。

2021年1学期までに、既に上記の中期段階までは実践済みで、2学期以降にオンライン会話を実施予定である。

上記のような取り組みは次のような点において学習支援として極めて有効である。

- 1) インターネットを活用することで、留学に行かなくても実際のコミュニケーションの場面を作り出すことができる。
- 2) ライティングや動画作成の折にも相手を想定しやすいので、コミュニケーションに対するモチベーションが上がる。
- 3) コミュニケーションにおいて、相手への配慮の意識が働き、技能面においても表現における具体的な選択ができる。

もちろん、このような実践にはそれなりの設備が必要であるし、また、教師の負担も大きいであろう。多忙を極める中、意欲的に取り組んでおられる現場の先生がたに敬意を表したい。生徒の学ぶ意欲や、また英語の技能面においてもその成長を図るに大きな意義があるであろう。

3. 多様な学力の生徒にどのように対応するか？

中学校学習指導要領(平成29年告示) 総則編(2016:81)には「各学校において学校生活全体における言語環境を整えるとともに、言語能力を育成する中核的な教科である国語科を要として、各教科等の特質に応じた言語活動を充実する。」とある。

3.1 日本語と英語の比較の観点から

言語を道具や受験科目として考えるのではなく、観察し鑑賞する対象として、日本語と英語を相対的に扱いな

がら言語やその背景にある文化への気づきをもたらし可能性について考えてみたい。松谷は10年以上にわたって、大学1年生対象の日本語の文化・英語の文化(旧名:日英対照言語学)という授業の中で、和歌の日本語とその英訳を扱っており、学生には好評である。例えば、次のような比較的有名なわかりやすいものを選び、いくつかの英訳とともに提示する。

久方の ひかりのどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ	奥山にもみぢふみわけ鳴く鹿の 声聞くとときぞ秋はかなしき	しのぶれど色に出でにけり わが恋は 物やおもふと人のとふまで
-----------------------------------	---------------------------------	--------------------------------------

いずれも百人一首の有名なものであるが、英語訳も複数示し、「答えは一つではない」こと、「感じたことを込めて言葉で表現する」こと、そして、それぞれの言語表現の相違、言語の背景にある文化や自然と人間とのあり方などを考える。さらに、活動の一つとして、英語版をもとに日本語の現代版を作ってみようという課題を出す。すると学生たちは楽しんで、それぞれ工夫を凝らして見せてくれる。英語と日本語を行き来しながら、母語を使った表現を行うことになるので、英語の学力にあまり関係なく、だれもが自分なりの言葉を駆使する様子が窺われる。また、改めて母語についての気づきを得たという学生のコメントもよくある。以下に、英語版と、それをもとに2019年度の授業で学生が作成した現代日本語版の例を3つ紹介する。

Though I try to keep it secret,
my deep love
shows in the blush on my face.
Others keep asking me
—Who are you thinking of?

(マックミラン 2009: 99)

A) 私はそれを秘密にしようとするが、私の深い愛は顔に出てしまう。
他の人達は私にたずね続けるのだ あなたは何を
考えているの？

B) 私は自分の深い愛をかくそうとするのだが
赤面が勝手に話してしまう。

「誰のこと考えてるの？」と友達は何も聞かずに続ける。

日の教育形態として、発展するようになってきました。
(笹島他 2011: 13)

C) 私は秘密にしようとするけれど

私の頬の赤みに私の深い愛はあらわに。

他の人が私に尋ねてくるの。

君は誰のことを考えているんだい？

CLILはCBI (Content-based Instruction 内容中心指導法)とその原理や技法において似ているが、もともとCBIはアメリカの学校でESL (English as a Second Language第二言語としての英語)を英語母語話者が教える発想であるのに対し、CLILは上記にもあるように、ヨーロッパ諸国で、EFL (English as a Foreign Language 外国語としての英語)を非母語話者の教師が教えるものとして広まったヨーロッパ市民育成を目指したものであった。

学習者にとって、言語表現において難しすぎないこと、内容面において手ごたえある「質」で、且つ、興味あるもの(恋の歌)であるということが、学習者の意欲を引き出すのではないかと考える。

授業は次の4つのCを有機的に統合して行うものとされている。(Coyle, Hood, and Marsh 2010: 41)

3.2 CLILの考え方と日本における課題

中学校・高等学校では英語の授業を英語ですということになっている。教員が英語で授業を実施することによって、日本の日常にはない英語のコミュニティを、一時的にはあるが、作ることができる。生徒を英語に慣れさせる効果がある。留意しなくてはいけないのは、教員の自己満足にならず、生徒が英語を使う機会を増やすことが大切だということである。

- Content (subject matter)
- Communication (language learning and using)
- Cognition (learning and thinking processes)
- Culture (developing intercultural understanding and global citizenship)

ここでは、新しい社会に対応したアプローチとして教科科目等の内容とことばを統合したCLIL (Content and Language Integrated Learning)の可能性と授業での英語使用について考察する。

もともとヨーロッパでのニーズに沿って生まれたものであるため、4つ目のCultureはヨーロッパ市民の育成に重要な要素であるが、日本で紹介されているものの中には、例えば、渡辺・池田・和泉(2011)のように「Community 協学」を4つ目として挙げているものもある。また、笹島他(2011)では「Culture (Community) 文化(コミュニティ)」としている。鳥飼(2019: 123-124)は日本の場合であってもcommunity「共同体」と同様、culture「文化」は重要な要素であるとして、5Cもしくは6CとしてCLILを考え、その修正版CLILは目標を「グローバル市民の育成」に置いていることを付言している。

CLILは内容に注目することによって学習者の意欲的取り組みを促す効果があると言われている。そもそも、学習者が興味を持つのは「内容」であって、道具はあくまで道具である。だから、お買い物ごっこをする際、英語を道具として考えると、なぜそんな面倒な道具を使って活動しなければならないのかと動機が高まらない子がいても不思議はない。CLILは、英語を通して学ぶことで内容が広がり深まる可能性を狙っている。

笹島他(2011: 132-135)は実践のアドバイスとして以下の15項目を挙げている。

グローバル化は、以前には見られないような相互に関連した世界を構築しようとしています。新しい技術が情報や知識の交換を促進しています。さらに、このことが私たちの生活のすべてにわたって世界経済の統合と変化を加速させてきました。人やモノの移動は物理的にもバーチャルにもかなり盛んになっている現実があり、それに伴う言葉の必要性はますます重要になっています。複雑なグローバル社会に生きる現実は何をどのように教えるかにも影響を与えるようになりました。そして、そのような現実言語教育だけでなく、他のすべての科目の学習にもかかわるようになっていくのです。

1. 心理的にも物理的にも安全な環境をつくる
2. つねにCLILのことば(外国語)を使う
3. 生徒が日本語を使うのをはじめは受け入れる
4. ゆっくりと話し、はっきりと発音する
5. 適切なレベルのことばを使う
6. 意味を明確にするために表情、しぐさ、絵などを使う
7. くり返しは必要です
8. 意味ある活動をする
9. ことばのモデルを提示する
10. ことばを使う多彩な機会を作り出す
11. 特に大切なのはコミュニケーション

いくつかのことを統合する学習は、学習者にグローバル社会に適する知識や技術を効果的に提供する今

12. 4技能すべてが使える機会を与える
13. 学校でCLILのことば（外国語）を使うシステムを作る
14. 目標は高く、しかし現実的に
15. 生徒の努力や成功を評価する方法を見つける

笹島他 (2011)では、ヨーロッパやアジアにおける実践例と考察に加え、日本での実践例も紹介している。ヨーロッパではある程度普及しているとはいえ、国によっても扱いは異なるし、成功例もあれば失敗例もあるとしている。根本的な課題として、科目内容とことばという二重の目的があり、教える側にも教科内容の知識不足や外国語をうまく使えないといった問題が生じる。必然的に、教師の授業準備に多くの時間がかかるわけで、誰が、どんな教材を使って、どのように教えるのかという点は、教員養成や研修の問題となっている(笹島他 2011: 72-73)。また、マレーシアでうまくゆかなかった事例も挙げ、アジアの文化では馴染みにくいのではないかとの懸念も指摘している。日本については、小学校・高等学校・大学での実践が紹介されており、「中学校では、カリキュラム上の制約があり、まだ馴染みがなく、実施はむずかしいと考えられているようです」(笹島他 2011: 88) とある。

CLILは、小中高どの段階でも実践でき、学習者は英語以外の教科内容の知識を用いることができるので、内容への興味がモチベーションとなり、それほど英語が得意でない多様な児童・生徒への対応を可能にする。

例えば、次の方程式について、(1) から (5) の言述は英語だと (6) から (10) である。

$$x^2 - 5x + 6 = 0 \quad (*)$$

$$x^2 - 5x + 6 = (x-2)(x-3)$$

- (1) 方程式(*)の解は2と3である。
- (2) 2と3は方程式(*)の解である。
- (3) 方程式(*)の解は3である。
- (4) 3は方程式(*)の解である。
- (5) 2と3が方程式(*)の解である。
- (6) The solutions of (*) are 2 and 3.
- (7) 2 and 3 are solutions of (*).
- (8) The solution of (*) is 3.
- (9) 3 is a solution of (*).
- (10) 2 and 3 are the solutions of (*).

(1)も(2)も正しい文だが、(1)はその他の解はないことも言っており、(2)より内容が豊富である。(5)は(1)

と同じ意味で、正しく内容豊富である。(3)は間違い、(4)は正しい文である。これらの日本語文と英語文は齋藤 (2010: 102-105)で説明されているものであり、「日本語のふたつの助詞《は》と《が》の区別はきわめて論理的なものであり、しかも微妙である。われわれはその区別を感覚的に知っているけれども、日本語文をかくときは、いつもこのことを念頭においておくといいと思う。」(齋藤 2010: 105)とある。英語の冠詞の理解の観点からも興味深い。母語の感覚が身につく、方程式をよく理解している生徒は、英語でどう表現するのかについて(6)から(10)を訳さなくても、定冠詞と不定冠詞の違いも含め、概念的に理解できる。ただし、方程式の理解が母語の脳でできていないところに英語を持ち込むと、ますます混乱することになってしまうであろう。

母語で高等教育が受けられるのは日本のよいところである。日本では、母語で十分に教育ができるのに、なぜわざわざ不都合な道具（不自由な外国語）を使うのかというCLIL批判も当然生じてくる。特に中学校・高等学校と、教科内容が複雑になればなるほど、CLIL実践は英語教師のみがどんなに頑張っても、扱う内容によっては、単独では不可能であり、英語以外の教科の教員との協働が必要である。しかし、今の日本の学校では、現場の教員たちには教材研究を含めそのような取り組みを準備する時間的余裕は与えられていないのが実情であろう。特に、進学校は大学受験を意識せねばならず、むしろ、日本語を用いながら、複雑なことも学ぶほうが効率的である場合もある。

3.3 CLIL実践の可能性

3.2で論じたような現状の中、日本の教室にあってグローバル化の時代に対応した一つのモデルとして小川が前任校である山口県立大津緑洋高等学校で実施したCLILの実践を紹介する。英語表現IIの授業で環境・貧困・平和・医療・教育など様々なテーマを扱った。生徒の感想としては、「英文法をもっと学びたい」というような意見もあったが、「世界の現状を知ることができ、できることを始めたい」、「世界に目を向けるきっかけになった」など肯定的な意見が多かった。ここでは「環境問題と南北問題」を扱った授業の一部を記す。

Content (授業で扱う題材)

まずは世界が抱える環境問題にどのようなものがあるのかを個人で考えることから始めた。フィリピンのゴミ山問題やマイクロプラスチックの問題など一人ひとりが考えていた。まずは生徒自身が考える時間を設けた。

Cognition (「内容」について「思考」する)

テキスト本文を読み、その後、暗記や理解するという低次思考力(LOTS)だけでなく、一人ひとりが考えた問題についてどうすれば解決できるのか解決策を考えるなど創造や評価という高次思考力(HOTS)まで授業で扱えるよう意識して授業を組み立てることによって環境問題に対して問題意識を喚起させた。

Culture / Community (生徒相互の協同学習)

ペアワークでお互いに自分の考える環境問題と解決策を伝えあうなど、友人と話し合っって課題を解決する活動をさせた。最後は「クラス内環境サミット」としてプレゼンテーションを実施した。最後に英語でみんなに発表する時間を設けた。

Communication (4技能の指導)

プレゼンテーションの準備をする際のspeaking (発表)の指導、本文を読む際のreadingの指導、また、必要な言語材料の提供などを行い、生徒は授業全体を通して4技能5領域を学習していった。

4つのCに分けて授業の内容を記したが、英語の教科書には様々な題材が扱われている。教科間連携や教科横断というように英語以外の教員との連携は現場の実情を考えると簡単なことではない。しかしながら、2024年に発行される日本の新紙幣についての題材では、新紙幣の肖像となる歴史上の人物について各自タブレットで調べた後に、If you have a chance to introduce a person on a Japanese bill, who do you want to introduce?という質問を与え、一人で考え、ペアでやりとりをして、グループで発表するという構成であれば、英語の教員だけの授業も可能であり、新紙幣や歴史上の人物について「英語」を用いて学ぶことができる。このように教科書の言語材料だけでなく、教科書の題材にも焦点をあてることによって、英語で内容について考察し、学習者同士のやりとりを通じて、言語を身につけ、思考力・判断力・表現力を養っていくことができるのではないだろうか。「語るべき内容(content)があるからこそ、他者に伝える手段としての言葉(communication)が必要になる。また考えるべき内容があるからこそ、思考(cognition)が刺激され、広がりや深まりを増していく。さらに、他者との交わり(community)があるからこそ、コミュニケーションが重要になっていくのである。」(和泉 2016a: 76)とあるように4つのCを授業に取り入れることで授業の質を最大限高めることができる。CLILの手法で自分事としてとらえ、地球規模で進む多様な問題について学び、考えることでSDGsの理解にも役立つのではないかと考え、今後はCLIL×SDGsの授業実践を検討していきたい。

おわりに

今後の教育の現場では、デジタル化が加速してゆくであろう。社会の変化、その社会を背景とした言語の変化に伴い、新たに生まれてくる課題は複雑化していく。国際化や国際交流が一層盛んとなる時代において、英語を話すこと、特に、やりとりのスキルはもちろんのこと、多様な文化を背景とした言語への理解を培うことが英語教育においても求められる。また、デジタルの翻訳機能やAIが進化する時代に、「なんで英語を勉強しなくちゃいけないの?」という生徒の問いに対して、自分の思いを他者に伝えるためには適切な英語表現の知識が必要であるとの認識をもたらすことも教員の役割であろう。いっぽうで、多様な学力の生徒にどのように対応するか、現実のコミュニケーションにおいては読むこと書くことのスキルも重要であるといった点、母語での高等教育が可能な社会である日本における日本語と英語の教育はどうあるべきかといった課題は引き続き重要である。さらに、教科科目等の内容とことばを統合した新たなアプローチCLIL (Content and Language Integrated Learning) の日本における可能性について、国際的な視野で、世界におけるSDGsへの動きを見据えた実践も期待される。

付記

本稿は2019年度教育実践総合センター「山大教育発：次世代の山口県教育開発プロジェクト」に採択された「多様化の時代における日本の英語教育の新たな課題」における研究成果の一部である。論文中、表現の至らない点があれば、文責は松谷にある。

引用文献

- 安藤真雄. 2005. 『現代英文法講義』東京：開拓社.
- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Coyle, D., Hood P. and Marsh D. 2010. *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 和泉伸一. 2016a. 『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』東京：アルク.
- 和泉伸一. 2016b. 『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』東京：アルク.
- Kohl, J. R. 2008. *The Global English Style Guide: Writing Clear, Translatable Documentation for a Global Market*. Cary: SAS Institute Inc.
- マックミラン, ピーター (著) 佐々田雅子 (訳) 2009 『英詩訳・百人一首 香り立つやまところ』東京：集英社.

- メルケルバッハ, クリストフ (著) 大山万容 (訳).
2019. 「教育の潜在的葛藤場面における異文化間能力と言語能力」 西山教行・大木充 (編著) 『グローバル化のなかの異文化間教育：異文化間能力の考察と文脈化の試み』 東京：明石書店, pp. 151-171.
- 西脇幸太. 2019. 「他動詞eatの目的語省略」 現代英語談話会編 『英語のエッセンス』 大阪：大阪教育図書, pp.51-61.
- 齋藤正彦. 2010. 『日本語から記号論理へ』 東京：日本評論社.
- 笹島茂他. 2011. 『CLIL 新しい発想の授業：理科や歴史を外国語で教える』 東京：三修社.
- 住吉誠. 2016. 『談話のことば2 規範からの解放』 東京：研究社.
- 鳥飼玖美子. 2019. 「脱グローバル時代の英語教育に求められるもの」 西山教行・大木充 (編著) 『グローバル化のなかの異文化間教育：異文化間能力の考察と文脈化の試み』 東京：明石書店, pp. 106-128.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一. 2011. 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦』 (第1巻 原理と方法) 東京：上智大学出版会.